

八十島義之助・井上 孝 共訳

都市の自動車交通

イギリスのブキャナン レポート

奥田 教 朝*

交通問題は衣、食、住について生活の重要な要素として、日常生活のなかで大きなウエイトを占めるに至り、都市、農村を問わず現代の喫緊の課題である。わが国においても、戦後自動車の急激な増加によって、ここ 10 数年来各種の対策が講ぜられてはいるが、都市ごとに大都市においては急増する交通に対処することができない現状で、その根本的調査研究が広く強く要望されているところである。

イギリスにおいても、都市における路面交通問題は重要な問題であって、運輸大臣は 1961 年に調査委員会を設置して、「都市地域における道路と交通の長期発展とそれが都市生活環境におよぼす影響」について諮問した。同委員会は 2 年間の調査研究の結果、1963 年 11 月に広汎なる調査報告書を運輸大臣に提出した。その委員会は推進グループおよび研究グループの 2 部に分かれて検討されたが、その報告書の大部分は研究グループの業績によるもので、そのグループの長さをつとめた Colin D. Buchanan の名を冠して「Buchanan 報告」と呼ばれている。その報告書はイギリス政府が刊行したのであるが、今般東大土木工学科八十島教授および都市工学科井上教授とそのおのおのの教室の人々が原文に非常に忠実に翻訳し、さらに鹿島研究所出版会が印刷、製本の体裁も原書にできるだけ合せて、昭和 40 年 8 月に出版されたものである。

この研究グループは Buchanan 以下 9 人の委員と 6 人の臨時委員、合計 15 人から構成された。Buchanan はイギリスの運輸省および住宅・自治省に長くつとめ、現在は London 大学の運輸に関する講座の教授であり、1963 年から 64 年にかけて都市計画学会長をつとめた斯界の権威者である。研究に当っては全く自由な立場にたつて、単に道路や鉄道などの交通面からだけでなく、都市生活環境の面とあわせて、都市構成上の見地から総合的に考察を進めてその対策を示している。

この報告書は、① 概要、② 理論的基礎、③ 実際的研究、④ 事例にあらわれたいくつかの課題、⑤ 一般的な結論の 5 章からなっている。

* 正会員 帝都高速度交通営団理事

理論的基礎となっているのは循環の原理であり、都市内をいくつかの単位区画に区分し、その区画内には通過交通を入れない。その区画を居住環境地域 (Environmental area) と称し、それらの境界をなす道路を分散道路 (Distributor road) と称し、その性格に応じて、幹線、地区、局地の 3 階級に分けている。幹線分散路は高速道路の規格が要求されて、それからは直接建物への出入には使われない。そのためには、局地分散路から地先道路 (Access road) が使用されて、地域内の交通に対処するものとしている。

居住環境地域は住居、商業、工業などの地域が安全であり、騒音がなく、そして快適であるために、その地域に用のない交通をその中に入れないようにするだけでなく、必要な車は目的地に到達し停車することができるように考えられている。

さらにこの報告書の特徴は、とかく理論だおれあるいは関係題目の羅列に陥りがちなこの種の研究に関して、各種の実例について検討してあることと、自動車交通について多年貴重な経験のあるイギリス内の新都市、欧州大陸の都市、アメリカの都市などにおける課題については、検討してその批判を加えていることである。実地について研究したのは、小都市では人口 3 万の Newbury、大都市では人口 50 万の Leeds、歴史的都市では Norwich、さらに巨大都市の中心地区としては、London の都心部の一区画を採っている。また、事例にあらわれた課題としては、Los Angeles, Stockholm, Coventry, Cumbernauld などについて紹介してある。

おおよそ、都市計画、交通などの社会問題に関して外国の研究、事例などを導入する場合は、国情の違い、社会開発の状況などを勘案しなければならないが、この報告書を見ると、イギリスとわが国とが都市の交通に関する問題点で余りに類似、共通している点が多いので一驚する。もっとも、人口、都市化の程度、自動車保有台数、またその普及率などでは階差があるにもかかわらず、類似点が多いことはわが国としてさらに研究しなければならない点であろう。この報告書は、都市計画、交通に係る技術者だけでなく、広く都市問題に係る学者、行政官、政治家などに推しようし、一読を煩わしいものである。

なお、この翻訳書は装丁、図表から割付けまで原本に忠実に出版されたのは敬意を表するが、反面やや高価となり、一般に入手しにくいのではないかと心配するものである。イギリスにおいては、原本に近い抄本が Pelican book series の一つとして刊行されていると聞くが、わが国にでも同様の企画により手近に入手できるように切望する。またせっかくの図書であるが、ミスプリントが散見されたので、つぎの機会になるべく早く訂正されるようあわせ望むものである。